

子どももコロナ感染

自宅療養 注意深く観察を

新型コロナウイルスの流行「第6波」の到来が懸念される中、ワクチンが打てず「第5波」で感染が広がった子どもへの対策が課題となっている。日本小児感染症学会理事長を務める尾内一信・川崎医療福祉大特任教授は「年齢制限でワクチンが接種できない12歳未満を標的とし、子どもの間では第5波より感染が拡大する可能性もある」と指摘。「2歳未満は重症化リスクが高い。自宅療養する場合、周囲の大人が注意深く健康観察を」と訴えている。(水嶋佑香)

予 防

子どもは大人より感染しにくいとされてきたが、感染力が強い「デルタ株」の広がり、状況は変わった。第5波では、県内でも保育施設や学校などでクラスター(感染者集団)が続発した。

会は、窒息や乳幼児突然死症候群(SIDS)のリスクがあるとして2歳未満にはマスクを着用させないよう呼び掛けている。

感染予防には周囲の大人の行動が重要だ。ワクチンを接種することも、予防効果が高い不織布マスクを着用。手洗いや玩具の消毒も徹底してほしい。

体 調 変 化

特に気を付けなければならぬのが2歳未満の子どもだ。免疫力が十分に備わっていないため、生後6カ月未満の乳児はさらに注意が必要となる。だが、乳児にマスクを着けてもらうのは難しいし、中酸素濃度が低下する「ハッピハイポキシア(幸せな低酸素状態)」に陥る危険もある。日本小児科医

子どもが感染者または濃厚な接触者となり、自宅で過ごす場合、保護者は体調の変化に気を配ってほしい。恐ろしいのは顕著な症状が伴わず、血中酸素濃度が低下する「ハッピハイポキシア(幸せな低酸素状態)」に陥る危険もある。

尾内 一信

川崎医療福祉大特任教授



「子どもが自宅療養する場合、周囲の大人が注意深く健康観察を」と話す尾内特任教授

血中酸素濃度、呼吸確認

看 病

同居する家族全員が感染者でない限り、子どもの発症から10日間は家庭内感染に注意する必要がある。看病は、可能ならワクチンを接種しており、より若く基礎疾患がない家族の1人に限定すべきだ。幼いきょうだいがいる場合は、2メートルの距離を保つよう気を付けてほしい。

感染した子どもが療養するエリアは限定する。触れた物の消毒と1時間に6分程度の換気を。看病する家族は不織布マスクを着用し、小まめに手洗いを。便にもウイルスは含まれるため、おむつは二重のビニール袋に密閉して捨てる。トイレでできる年齢の場合は、ふたを閉めた後に水を流して掃除する。衣服は通常の洗濯で感染力はほとんどなくなるとされている。

県感染症情報センターによると、県内の新型コロナウイルス感染者1万3935人(19日時点、年代非公表を除く)のうち、未成年者は1235人(8.9%)。流行「第5波」が勢いを増した8月に急増し、7月末時点(465人)の2.7倍となっている。内訳は10代が1053人(7.6%)で、10歳未満が182人(1.3%)。年代が非公表だった1567人中にも未成年者が多数いるとみられる。

未成年「第5波」で急増

入院や宿泊 対応課題

子どもが感染した場合の療養先も各保健所が決定。無症状、軽症の場合は自宅療養となるケースが多いが、家庭環境や症状に応じ、県の宿泊療養施設への入所または入院となる。

問題となるのは、付き添いが必要な小さな子どもが感染して症状が悪化した場合だ。保護者も感染していれば、一緒に入院または宿泊療養施設に入所できるが、保護者が濃厚接触者で陰性のケースは難しい。目が行き届きにくい宿

県内で子どもが感染、濃厚接触者となった場合の療養

子どもが感染 保護者が濃厚 接触者	軽症、無症状なら、原則として自宅療養。保護者の付き添いが不要な年齢だと宿泊施設での療養となることも。入院が必要な場合、付き添いは関係者で協議する
子ども、保護 者とも感染	両者とも軽症、無症状なら、原則として自宅療養。症状や家庭の環境などによっては一緒に入院、宿泊療養となる場合もある
保護者が感染 子どもが濃厚 接触者	保護者が入院や宿泊療養で子どもの世話ができない場合、親族に世話を依頼。困難な場合は児童相談所が対応

泊施設の利用は想定されており、1人での入院または保護者の付き添い入院となるかを関係者で協議することになるという。

則安俊昭・県保健医療統括監は「子ども間の感染を防ぐため、体調不良時は登校園の自粛をお願いしたい」と強調。「子どもの受け入れ可能な医療機関を拡充させることも、柔軟な運用ができるよう関係者の連携を図りたい」としている。

(水嶋佑香)